骨節病

鶴膝の御病ありて、あやうくおぼしめしける故なるべし、

〔塵塚談下〕養生所へ甲戌○文化十一年十一月十日來病人之事

本郷春木町三丁目嘉右衛門店

安五郎　戌四十一歳

右之者、戌七月便毒を煩ひ、平愈の後に陰毛中へ、大豆程なる腫物出來、膏藥にて早速に愈たり、其後骨痛を發し、養生所へ願出、逗留罷在の所、十一月十五日、湯風呂屋の縁側にて、尻餅をつよくつきけるが、いさゝかのさはりもなく、入湯いたし、部屋へ歸りふせりけり、其夜小便に起立しに、頭骨がたゞ〳〵からゞ〳〵みしゞ〳〵とつよき音いたし、痛つよく眩暈し、それより起臥出來かね、おきあがると、頭がまへにたれ下るにより、頰杖を兩手にてつき、頭を抱へ起坐す、食事の時は横にふし、左を下にし喰なり、頭骨三つの内、中の節くじけし樣に覺ゆるよしを申聞る、十二月中旬に至り、痛心よく兩便常の如く、食事よく氣力もよし、頭の前へたれ下るの病ひのみになれり、醫經に、大椎骨の上の三節を頭骨とし、大椎より下を背骨とす、顯然たる理なり、此病人全く頭骨の離れしもの也、

痛風

〔覆載萬安方二〕歴節風

論曰、歴節風者、由血氣衰弱、爲風寒所侵、血氣凝澀、不得流通、關節諸筋、無以滋養、眞邪相薄、所歴之節、悉皆痛疼、故謂歴節風也、痛甚則使人短氣汗出、肢節不可屈伸、

〔内科秘錄四〕歴節風　白虎歴節風　痛風

歴節風ハ古名ニテ金匱要略ニ載ス、後世ニ至リ痛風ト通稱ス、丹溪ノ格致餘論ニ痛風ノ論アリ、然レバ痛風ハ元以降ノ名ナルベシ、素問痺論ニ所謂痛痺、行痺ハ蓋シ痛風ノ類ナリ、白虎歴節ハ外臺及三因方直指方等ニ出ヅ、其病狀白虎ニ咬ルヽヤウニ疼ムニ因テ名ヅケタルナリ、